



水の文化  
小水力の  
包蔵力

ポテンシャル



- 倉阪秀史「中山間地はエネルギー先進地域」
- 三野 徹「水路を『共の論理』で運用する」
- 編集部「働く水車が伝える水のポテンシャル」
- 小林 久「エネルギー自立型から供給型へ」
- (財)新エネルギー財団「環境を自分たちの力で守るエコ意識」
- 阿部敏明「排出量取引の現状」
- 水の文化楽習実践取材「ミニ発電でくるくる地域づくり」
- 永島敏行「水、土、木、無心になれるもの」
- 古賀邦雄 水の文化書誌「水路」

水の文化  
2008  
28

水の文化 February 2008 No. **28**



ミツカン水の文化センター

表紙上：動力として直接的な力を使っていた水車だが、小水力発電では水のエネルギーを電気に換えて利用する。効率だけでいったらシステムが見えないパイプの中の水車の方が有利。しかし、見える水車は水のエネルギーの大きさ、迫力を意識させるという別の役割も果たしている。

表紙下：水路を守るには、「共」の意識が大切。しかし、それは個人にとって価値のある「共」であることが前提となる。

裏表紙上：長野県大町市の木崎湖。湖の水位を調節したり、下流の水量コントロールのために設けられた水門。こうした水門や開門の内側と外側とは、水位が違っているはずだから、小さい落差からエネルギーが得られるという、小水力発電の優れた特徴を活かす最適地ではないだろうか。

裏表紙下：水路に隣接する新田の川端（かばた）。滋賀県高島市には、敷地内に湧水を持つ家が多く、水路沿いに小さな離れが並んでいる。もし、これが小さな水力発電所で、各戸が自分の使用するエネルギーをまかなえたらと夢が膨らむ。芋洗い水車も小水力発電も同じようなもの、と思うのだが、いかがだろうか。

